

## 第1部

# “新しい絆”が社会を変える ～児童虐待も見据えて～

## 虐待から子どもを守る「特別養子縁組」と「里親」

コーディネーター 猪瀬美樹さん（NHK ディレクター）

“新しい絆”という、皆さんはどんなことを想像されますか？ 様々な絆、家族の形がある中で、第1部のセッションでは、主に「特別養子縁組」と「里親」を中心に上げたいと思います。えにしの会にしては、何だか柔らかいテーマのようにお感じになるかもしれませんが、このテーマは、いま社会的にも大きく注目されている“子どもの虐待”や“虐待死”と密接に関わる重要なものです。

そして、このセッションをお届けするのに、素晴らしい登壇者の皆さんが揃いました。養子の当事者として発信を続けている女優サヘル・ローズさん。《家庭養育優先原則》を明文化した画期的な児童福祉法の改正に尽力された衆議院議員・塩崎恭久さん。児童相談所の職員として、“赤ちゃんの虐待死”を防ぐのに有用とされる新生児の特別養子縁組『赤ちゃん縁組』の普及に取り組んできた萬屋育子さん。そして、欧州の事情に詳しく、地元・長野では乳児院の改革に取り組む児童精神科医の上鹿渡和宏さんです。

2016年の児童福祉法改正で、国は親との死別や虐待・貧困などの理由で“親と暮らせない子どもたち”に、《施設養育》よりも《家庭養育》を優先することをはっきりと宣言しました。しかし、現状では8割の子どもが今も《施設》で暮らしています。この状況をどう変えていけばよいのか（日々、成長している子どもたちにとって、この一瞬一瞬が貴重でかけがえのない時間です）。また、これまで子どもたちを支えてきた《施設》には、その専門性を活かし、新たにどんな役割を担ってもらえばよいのか。国や自治体、そして、私たちは何をすべきか。皆さんとともに考えていけたらと思います。

### きっかけは — “赤ちゃんポスト” に託された遺体

以下、私ごとながら、このテーマに関わることになった経緯と想いを書かせていただきます。この数年、私の心を捉えて離さないのは、“赤ちゃんポスト”に自分が生んだ赤ちゃんの遺体を預けた女性の姿です。

2014年10月3日の夜8時過ぎ。熊本市内のホテルにいた私は、テレビから流れるニュース映像に目を奪われました。—「“赤ちゃんポスト”に、生後間もない男の子の遺体が遺棄されているのが発見されました…」。

実はそのわずか数時間前まで、私はまさにその“赤

ちゃんポスト”（正式名称『このとりのゆりかご』）を運営する慈恵病院で、院長・蓮田太二医師を相手にドキュメンタリー番組の撮影に向けた交渉を行っていたのです。私の提案は、病院が『このとりのゆりかご』開設以来、24時間365日続けてきた『SOS妊娠相談（無料の電話相談）』の相談室にカメラの三脚を据えさせてほしいというものでした。目的は、“予期せぬ妊娠”に悩む女性たちの実像を伝えることでした。しかし、交渉の壁は厚く、蓮田医師の回答は「15分程度の撮影を行うのは構わないが、それ以上、撮影

クルーが相談室に居続けることは、相談者のプライバシー保護の観点から難しい」というものでした。

ニュースを見た直後の感想は、「もう番組の撮影許可は下りないだろう」という暗澹たる想いと「赤ちゃんの遺体を『ゆりかご』に預けるなんて、なんてひどいことをするのか…」という嫌悪感でした。

翌日、31歳の母親が逮捕されました。

事件から2週間後、私は蓮田医師に電話を掛け、恐

る恐る事件について尋ねました。蓮田医師は穏やかな、でもきっぱりとした口調でこう答えました。

「お母さんには、何か“事情”があったのだろうと思います…。赤ちゃんを『ゆりかご』まで連れてきたということは、“この病院なら助けてもらえるのではないか”と思ったのでしょうか。ここに赤ちゃんを連れてくるお母さんたちは、みんなそうです」。

女性を責める言葉は、一切ありませんでした。

## ドキュメンタリー『小さき命のバトン』からの宿題

その後、病院とプライバシーの保護について綿密な取り決めを交わし、“撮影の扉”は開かれました。

死体遺棄事件の取材からは、女性が置かれていた孤独な境遇が浮かび上がってきました。女性はシングルマザーで難聴の障害がありました。中学生の頃にはいじめに遭い、ひとりも友達がいませんでした。働いていた会社が倒産し、解雇された直後に妊娠に気づきますが、交際相手とは連絡が取れなくなりました。お金もなく、健康保険証も持っていなかった女性は誰にも相談できないまま、自宅の風呂場で出産。生まれてきた赤ちゃんの体は冷たく、既に息をしていなかったといえます（司法解剖では、赤ちゃんの肺に空気が入っていなかったことが明らかになっています）。

裁判で、弁護士は女性に対して「なぜ、『この通りのゆりかご』に遺体を預けようと考えたのですか？」と問い掛けました。女性は、絞り出すように答えました。

「“助けてもらえる”と思ったからです……。赤ちゃんを供養してもらえないのではないかと思います。十か月間、自分のお腹で育ててきた子どもだから、大事だと思っていました。“捨てよう”と考えたことはありませんでした…」。

番組は『ETV 特集』「小さき命のバトン」として、

2015年5月に放送されました。半年に渡る密着取材では、様々なSOSの声に触れました。十代の妊娠、性暴力被害や近親相姦による妊娠、貧困に喘ぐ女性たち。相談件数は、開設から8年間で9千件以上に及んでいました（当時）。身近に相談できる場所がなく、孤立している人がこんなにも多いのかと圧倒されました。

相談員たちは、女性たちの声に十分に耳を傾けた上で、まずは「自分で育てられるよう」に家族を説得したり、地域の支援へとつなげていました。しかし、育てることが難しい場合は、新生児からの特別養子縁組『赤ちゃん縁組』を勧めていました。

『赤ちゃん縁組』については、愛知県児童相談所の30年以上に渡る実践や、複数の縁組家族・養子当事者の取材から、その意義や有用性を実感していました。一方で「様々な性格の子どもたちがいる中で、思春期や大人になってから“ルーツ”について悩み、苦しむ子もいるのではないか」という想いも残りました。

昨年から、改めてその宿題と向き合うことになりました。養子縁組を経験して大人になった複数の当事者のインタビュー、“ルーツ探し”の支援、“真実告知”の重要性や方法などをまとめたDVD教材『新しい絆の作り方 特別養子縁組・里親入門』を作りました。ご関心のある方は、お手に取っていただければ幸いです。

★NHK 厚生文化事業団・福祉ビデオシリーズ『新しい絆の作り方 特別養子縁組・里親入門』（DVD全2巻）

「福祉ビデオライブラリー」にて無料で貸し出しています。詳しい情報は ⇒ <https://www.npwo.or.jp/video/13172>